

日蓮宗「法華経要品」成立考

松村 寿 巖

はじめに

ここでテーマとする法華経要品とは、周知の如く法華経一部八卷二十八品の中から、特に重要とされるいくつかの品を取り出し、まとめられた肝要品のことである。因みに、現在日蓮宗で一般に通用している要品は、序品・方便・提婆・寿量・神力・嘱累と卷八所収の普門・陀羅尼・嚴王・普賢の合計十品で、さらに「欲令衆」「此経難持」「以要言之」などの要文を収めたものをも要品と称している。

なお、この法華経の要品化という視点で、いち早く解明に努めたのは、故兜木正亨教授の「法華経の要品・要文・題目の成立」(『法華』四十七卷六号所収)であり⁽¹⁾、また、法華経四要品の成立について言及したのが、高木豊教授の『平安時代法華仏教史研究』第五章・五節「法華経歌・法文歌の数量的考察」である。今これら先学の業績をふまえつつ、ここでは、日蓮宗における法華経要品の成立について、具体的には、同じ法華経を依経としていても、門流・門派によって、また教義のたて方によっても、要品の形成は一律ではないようなので、まずこの点を紹介し、さらに法華経要品の成立過程の経緯について、論をすすめたい。

法華經要品の成立過程をみる前に、日蓮聖人の法華經読誦の次第をまずみておきたい。「今、日蓮法華經一部よみて候」(『転重軽受法門』定遺(以下略)五〇八頁)と読誦される如く、聖人自身は、法華經は仏の金言として經の一字一字を生身の仏とみられ、その一字たりともおろそかにしないというのが、法華經に対する聖人の基本精神であるから、端的には指摘しにくい。しかし、聖人が信行者に対して与えた消息の中に、読誦すべき法華經の品々を教示しているものがある。

例えば、大学三郎の妻は、法華經を毎日一品ずつ読み、二十八日で一部を読んでいたという。しかし、このごろでは女人往生を説く薬王品一品を毎日の所作としているが、もとのように一日一品ずつの読み方がよいのかとの問に対して、聖人は、八卷・一卷・一品・一偈・一句・一字ないし題目、いずれも功德は同じと教示しながら、法華經中最重要なのは方便品・寿量品の二品であるとし、

されば常の御所作には、方便品の長行と寿量品の長行とを習ひ読ませ給候へ(『月水御書』二九〇頁)

と両品の読誦を勧めている。さらに、余品についても言及して、

寿量品・方便品をよみ候へば、自然に余品はよみ候はねども備はり候なり。薬王品・提婆品は女人の成仏往生を説けて候品にては候へども、提婆品は方便品の枝葉。薬王品は方便品と寿量品の枝葉にて候。されば常には此方便品・寿量品の二品をあそばし候て、余の品をば時々御いとまのひまにあそばすべく候(同頁)

という。また聖人は、曾谷入道に対しても、

方便品の長行書進じ候。先に進じ候し自我偈に相副て読みたまふべし(『曾谷入道殿御返事』九二二頁)

と、自ら書写したものを与え、これを読誦せしめている例もある。

これら僅かな事例を掲げたにすぎないが、ここでみる限りでも、方便品・寿量品（自我偈）にその比重が置かれている。なお『法華題目鈔』（三九五頁）によると、法華經の広・略・要が説示されていて、広Ⅱ一部八卷二十八品であり、略Ⅱ方便品・寿量品であり、要Ⅱ一四句偈ないし題目とされている。

この広・略・要の区分の内、敢えていえば、略がその要品にあたり、聖人がこの方便品・寿量品を肝要品とすることは、聖人通常の教義が反映したことに外ならないといえよう。それ故、信行者の日常に読誦する法華經は、方便品・寿量品（自我偈）の二品へと集約されていったと思われる。無論、法華經の広・略・要が説示された如く、その能力に応じた随時随人の別があることも当然である。

なお、聖人の数多い遺文の中に、「四要品」ということばが出るところが一カ所ある。すなわち『唱法華題目鈔』に「一部・一卷・四要品・自我偈・一句」（一八四頁）と次第簡略をしたためたところで見出せるのである。ここでいう「四要品」とは、唐の湛然（七一―一八二）が『法華文句記』卷一で、方便品・安樂行品・寿量品・普門品の四つの品を「今、義便に随えば、広・略時に適う。故に方便・安樂・寿量・普門は並びに是れ本・迹の根源、此の經の枢鍵なり」⁽²⁾と解釈していたことに由来し、この見方がわが国に将来されて、十二世紀前半にこの四つの品が「四要品」と呼称されて定着したことは、高木豊教授前述の著作の中で詳細にわたって指摘されているところである⁽³⁾。ここでみる如く、この「四要品」の内容を聖人は存じていたことは明白である。しかし、この下りは、聖人に対する法然念仏信者の難詰の文の中にあることばで、聖人がこの「四要品」をことさら依用していたとはいえないであろう。前述の如く、方便・寿量品にその重きをおいていたと考えられ、今にいう法華經要品といった考えとは多少の相違があるように思われる。

さて、次に聖人滅後におけるその展開をみると、京都四条門流・妙顕寺にて、現在、日蓮宗で通用している法華経要品の萌芽といったものがみられる。それはいわゆる妙顕寺法式と呼ばれるもので、日像滅（一三四二年）後、ほどなくこの法式を破らんとするものが出て、同寺を踏襲した大覚妙実はこれを制止すべきことを朗源に強く戒告している中に⁽⁴⁾、

一、毎朝勤行之事、序品退座一面まで、方便品十如是三反、欲令衆生、寿量品一卷、陀羅尼品、普賢之咒、題目以下

と規定されていることである。次の条目には、日像八歳のとき、聖人から直接、法華経読誦を教授された様子を、大覚妙実は次のように述べている。

先師八歳之時、法花経之勘文習給候へとて、方便品十如是までと、又今之欲令衆生已下寿量品之偈、此経難持、以要言之、御口唱候を御うけとり候、幼少にて元師へ給仕申候時ハ黑白をも弁ざりしに、御慈悲にて御教候、此文を誦候時、拜顔之心してなミだにむせび候と、先師常々御物語にて候つると、その情景を描写している。

これを見るにこの時代、妙顕寺ではすでに法華経の読誦次第が整えられてきている。聖人直授の「欲令衆生」の要文も朝勤読誦次第に組み入れられ、現行の法華経要品に近い形式で読誦されていたことがうかがえる。

この外、聖人日常の所作に関するものとして、後世の伝記であるが、身延第十一世行学日朝（一四二二—一五〇〇）の『元祖化導記』⁽⁵⁾がある。これによると、「或記云」くとして、聖人身延での毎日の所作を、「早旦入持仏堂法華経一卷」を読誦し、その後さらに日天子に向い、「方便品・寿量品・宝塔品・勸持品・涌出品・神力品等、是等

の要品誦」し、「日中ニハ法門談義」があり、「夕方ニハ同音方便品・寿量二品誦之玉ヘリ」と記している。

この「或記云」くとしている所をみると、身延門流にそのような相伝書があったのか、また伝承されてきたのか、それとも行学日朝自身、もしくは日朝以前より身延通用の読誦次第を祖師に仮託したものが、ここでは、にわかには断定はできないが、いずれにしても、日朝の業績をうかがうとき、日朝自身、この一日の所作に則りて勤行を行っていたのではないかと思われる。

三

法華經要品に関する直接史料が出てくるのは、祖滅百年のころに出た慶林房日隆（一三八五—一四六四）の『本門弘経抄』⁽⁶⁾と思われる。本抄巻八にそれぞれ項目を立てて、各門家の要品を紹介、解説するに及んでいる。

まず、「輔正記に序品を以て四要品に取る事」の項では、

輔正記に云く、広・略・時に適ふとは、序品・方便品は是れ迹門の広なり、余品は是れ略なり、寿量・普門は是れ本門の中の広なり、余品は是れ略なり云云、義に云く、此の文の意は安樂品を除いて序品を入れ四要品と為すなり

とあり、先に記した湛然の『法華文句記』巻一にいう四品のなから安樂行品を除いて、序品をそれに代え、序品・方便・寿量・普門をもって四要品としたというのである。『輔正記』すなわち『法華文句輔正記』は、湛然と時を同じくした唐の道暹の作で、同じ天台門家といえども異説があったことがうかがえる。

次に「諸門流通用の要品の事」の項では、「宗義に云く、多分諸流、通用の要品とは方便・寿量・陀羅尼・普賢の四品なり」といい、「日像門流要品の事」の項では、「其の（方便・寿量・陀羅尼・普賢）外に序品・神力品を以て要品に取る事之れ有り」という。また「欲令衆生等の四品四所の要文之れ有り、此れは日像門流に限るなり」とある。

さらに日朗門流の要品には、「此経難持の誦文此れは日朗門流の儀式なり」と明記する。なおこの「日像門流要品の事」の項の中に本興寺流義、すなわち日隆の見解についても述べられ、「本門八品を以て要品と為す」と明示して、涌出品から囑累品の本門八品を要品としている。この他、法華経系の「一義」として、門流先師の中には、四要品の外に「宝塔品」（此経難持）・「提婆品」を要品に加えていることなども指摘している。

これらによれば、各門流には要品の内容について早くからいくつかの説があったこと、天台の四要品とは別に、日蓮教団独自、宗義に相応した四要品が形成されていたこと、宝塔品、提婆品もとり入れられたこと、妙顕寺四条門流の要品が現行の要品に類似していることなどが判明すると思う。

なお、堺妙国寺において天台学の講義を主とする三光無師会で用いていた要品は、日隆のいう「諸門流通用の要品」のようである。この門に連らなつた京都本満寺日重（一五四九—一六二三）は『見聞愚案記』巻一に、「要品ノ事、台家ニハ、方便・安樂・寿量・普門ノ四品也、宗義ニ入テハ、方便・寿量・陀羅尼・普賢品ノ四品也」といい、これは師の仏心日珙よりの相伝であつたことも記している。

四

では次に、現在、日蓮宗通用の法華経要品の原型になつたと思われる刊行要品について述べたい。

最も早く出版されたものと考えられるものに、貞享二年（一六八五）四月吉日、鱗形版で知られる「大伝馬町三町目 鱗屋開板」の『絵入り延べ書き訓読要品』がある。この要品は、

序品・方便・提婆・寿量・神力・普門・陀羅尼・普賢

の八品からなり、また、

欲令衆・此経難持・以要言之・円頓者

などの要文をも含んでいる。現行の日蓮宗要品に比べて、囑累品・巖王品の二品が入っていない要品であるが、その原型ともいえるであろう。

この二品が入ってくるのは、管見の限りでは、明治十二年（一八八九）、深草瑞光寺第十二世毘尼薩台巖によって、京都・村上平樂寺より刊行された『法華經要品和訓』⁽⁸⁾である。

さて、その囑累・巖王の二品が要品に取り入れられた理由は、実用の便宜上からのようである。というのは、この巖王品の一品を加えることによって、八の巻の全部が収まることになる。江戸末期から明治初期にかけて、祈禱読經の際、一部經読誦の便法として、八の巻の八回転讀をもって、これに代用したこともあったといわれているので⁽⁹⁾、これはその便法より取り入れられたといつてよいと思う。

また毘尼薩台巖の要品に続いて、明治三十六年に大阪・北村欽英堂より刊行されたのが、順要英俊の『法華經要品訓読』である。この要品は台巖の要品の系譜を引くもので、収録品々は全く同じ、また形式、内容についてもほぼ同一のものである。

この両要品、なかでも台巖の『法華經要品和訓』が、現在通用の日蓮宗要品と収録品々において何ら相違がなく、そのひな型となったといつても過言ではないだろう。

おわりに

ここで、日蓮宗における法華經要品の形成について要約すれば、妙顕寺の読誦次第にその萌芽がみられるが、日隆の『本門弘經抄』にみる如く、要品として整えられてくるのは室町期のことであつたろう。さらに時代が降ると、実用の便宜上から形成された要品、また、現在日蓮宗で通用の法華經要品の成立過程において、より強い影響を与えたのは、毘尼薩台巖の『法華經要品和訓』であつたといえよう。

なお、近世以降の刊行要品に共通していることは、ここでみる限りだが、絵入りで訓読、袖珍本の一冊仕立ての要品というのが一つの特徴である。この点を考慮すると、おそらく、その対象は在家信者にもおよび、一冊にまとめられた一冊本要品の方が出版の便に適し、また、それが広く普及する上での一つの方策でもあつたらう。

因みに、現在の要品の状況を記せば、各門派通用の要品はなく、各門派の要品には相違がみられ、門派独自の読誦次第に基づいて読経がなされている。日蓮宗でも厳密な要品に関する規定はないのが実状である。

それは優陀那日輝の『充治園札誦儀記』に「一部ノ要ハ、方便・寿量・神力ノ三品ニシクハナシ」といい、また「品々ノ要文ハ便宜ニ随ウベシ」⁽¹⁰⁾との見解に委ねたい。

なお、要品の形成は、法要儀礼の動向とも深い関係があるように思われるが、この点の解明は、後日に譲りたいと思う。

註1 本論は、のちに兜木正亨著作集 第三卷 『法華経と日蓮聖人』に収録されている。

2 『大正蔵』三四卷一五一頁下

3 『平安時代法華仏教史』二八六頁以下

4 『日蓮宗宗学全書』一九卷五三頁

5 高木豊校註『日蓮教学研究所紀要』(二号)所収本

6 『原文対訳・日隆聖人全集』一卷五二九頁以下

7 日重上人集刊行会編『日重上人集』一卷四頁

8 この要品は、坂輪宣敬教授所持本によつた。

9 兜木正亨「法華経の要品・要文・題目の成立」(『法華』四七卷六号)参照。

10 充治園全集刊行会編修『優陀那院日輝和上・充治園全集』二編二〇三・四頁

〔付記〕

拙稿の作成にあたり、立正大学図書館・法華経文化研究所の所蔵本、また小松邦彰・坂輪宣敬両教授所持の「法華経要品」を閲覧させていただき、本稿が成ったことをここに記し、感謝申し上げます。